

日蓮大聖人御書全集

かんじんのほんぞんとくしよ

観心本尊得意抄

新版
1311
）
1313

かんじんのほんぞんとくいししょう

観心本尊得意抄

けんじがんねん

建治元年（75）

11月23日

54歳

富木常忍

がつ ちち

さい と きじょうにん

がもくいつかんもん

あつわた

しろこそでひと

ふでじっかん

すみごちよう

た お

鵝目一貫文、厚綿の白小袖一つ、筆十管、墨五挺、給び畢

わんぬ。

みのぶさん

し

ふゆ

あらし

激

降

身延山は、知ろしめすがごとく、冬は嵐はげしく、ふり

つ

ゆき

き

ごっかん

ところ

そうろう

ちゆうや

ぎようほう

積む雪は消えず、極寒の処にて候あいだ、昼夜の行法も

肌 薄

た

がた

しんく

そうろう

こそで

き

はだうすにては堪え難く辛苦にて候に、この小袖を着る

おも あ

そうろう

ては思い有るべからず候なり。

しょうなわしゆ

ふほうぞう

だいさん

しょうにん

いんい

ほとけと

商那和修は付法蔵の第三の聖人なり。この因位を仏説

のたま ないおうかこ やまい びく ころも あた ゆえ
いて云わく「乃往過去、病の比丘に衣を与うる故に、

しょうじようせぜ ふしぎじざい ころも え いま おんこそで かれ
生々世々に不思議自在の衣を得たり」。今の御小袖は彼

に くどく にちれん し
に似たり。この功德は、日蓮はこれを知るべからず、しか

しながら釈迦仏に任せ奉り畢わんぬ。
しゃかぶつ まか たてまつ お

いまま ごじよう い きようしんごぼう かんじんのほんぞんしろう
そもそも今の御状に云わく、教信御房、観心本尊抄の

みとく とう もんじ つ しゃくもん 読 ぎしん そうろう
「未得」等の文字に付いて迹門をよまじと疑心の候なる

ふそうでん びやつけん そうろう い ぶんえいねんちゆう
こと、不相伝の僻見にて候か。去ぬる文永年中に、こ

しよ そうでん せいそく きへん たてまつ そうら とお
の書の相伝は整足して貴辺に奉り候いしが、その通りを

もつて御教訓あるべく候。詮ずるところ、在々処々に
ごきようくん そうろう せん ぞいぞいしよしよ

しやくもん

す

か

そろうろ

いまわれ

よ

迹門を捨てよと書いて候ことは、今我らが読むところの

しやくもん

そろう

えいざんでんだいしゆう

かじ

しやく

は

そろうろ

迹門にては候わず。叡山天台宗の過時の迹を破し候

てんだい

でんぎよう

ほう

いま

なり。たとい天台・伝教のごとく法のままありとも、今、

まつぼう

いた

こぞ

こよみ

じかく

末法に至っては去年の暦のごとし。いかにいわんや、慈覚

このかた

だいしよう

ごんじつ

まよ

だいほうぼう

どう

より已来、大小・権実に迷って大謗法に同ずるをや。しか

ぞうほう

とき

りやく

な

まつぼう

るあいだ、像法の時の利益もこれ無し。まして末法におい

てをや。

いち

ぼっけ

のうけ

なん

い

にぜん

きよう

一、北方の能化、難じて云わく「爾前の経をば『いまだ

しんじつ

あらわ

す

あんこくろん

にぜん

きよう

ひ

真実を顕さず』と捨てながら、安国論には爾前の経を引き

もんしよう

じごそうい

ふしん

まきぎのまきもつ

文証とすること、自語相違」と不審のこと、前々申せしご

そう

いちだいしようぎよう

おお

わ

ふた

いち

とし。総じて、一代聖教を大いに分かちて二つとなす。一

たいこう

に

もうもく

はじ

たいこう

じようぶつとくどう

には大綱、二には綱目なり。初めの大綱とは、成仏得道の

おし

じようぶつ

おし

ほけきよう

つぎ

もうもく

ほつけ

教えなり。成仏の教えとは法華経なり。次に綱目とは、法華

いぜん

しよきよう

か

しよきようとう

ふじようぶつ

おし

じようぶつ

已前の諸経なり。彼の諸経等は不成仏の教えなり。成仏

とくどう

もんごん

と

みようじ

あ

得道の文言これを説くといえども、ただ名字のみ有つて、

じつぎ

ほつけ

あ

でんぎようだいし

けつごんじつろん

い

その実義は法華にこれ有り。伝教大師の決権実論に云わく

ごんち

しよき

な

あ

じつぎ

あ

「権智の所作は、ただ名のみ有つて、実義有ることなし」

うんぬん

ごんきよう

じようぶつとくどう

ほか

せつそうむな

云々。ただし、権教においても、成仏得道の外は説相虚し

大綱のみを論じて綱目を委細にせざるなり」と。

問う。爾前を綱目とする証、いかん。

答う。妙楽云わく「皮膚毛綵は衆典に出ず」云々。

問う。成仏は法華に限るといふ証、いかん。

答う。経に云わく「ただ一乗の法のみ有り。二無くま

た三無し」文。

問う。爾前は法華のためとの証、いかん。

答う。経に云わく「種々の道を示すといえども、仏乗の

ためなり」。

いさいもう

そうろう

こごちいれい

そうろう

委細申したく候といえども、心地違例して候ほどに、

しょうりやく

そうろう

きようきようきんげん

省略せしめ候。恐々謹言。

じゅういちがつにじゅうさんにち

十一月二十三日

にちれん

かおう

日蓮 花押

ときどのごへんじ

富木殿御返事

そつどの

ものがた

しもうさ

もくれんじゆ

き

そうろう

由

帥殿の物語りしは、下総に目連樹という木の候よし

もう

そうら

き

ね

掘

じゅうりよう

りようほう

申し候いし、その木の根をほりて、十両ばかり、両方の

き め

や

がね

あ

かみ

厚

包

かぜ引

切り目には焼き金を宛てて、紙にあつくつつみて、風ひか

拵

たいふのじろう

びんぎ

た

そうろう

由

ぬようにこしらえて、大夫次郎が便宜に給び候べきよし、

おんつた

そうろう

御伝えあるべく候。